んが來た。そこで他に何所か宿屋は無いかと聞いて見ました。するとステーション前かさも無くば栗橋の町に一軒高瀨屋と云ふ宿があると敎えて吳れた。その時聞けば彼の宿屋ではその日息子の婚禮があつたのだと云ふ譯でした。成程それで樣子がのこらず解りました。

偖てそこで何所の宿屋に行かうかステーション迄では十町近き道程がある。終に近い高瀨屋に行つて見ることに決しまして。雨で滑りさうな堤をあぶない腰付で町に下り、その高瀨屋に尋ねて行きました。その家は成程宿屋には違い無い。然し今日此頃の時候何と難有い觀音樣でも居さうな家。それには舊の五月節句にでも間に合すのか、今下の座敷では鯉幟を懸命に彩色爲て居る。店の樣子から見ると奈何も自分等と同業者らしい。他に「繪びら」の樣な物も一二枚見懸けた。然し今更に無據いから先づその家に泊ることに極めた。先づ二階に上ると天井は無く、梁の丸太が遠慮も無く顯れて居る。剩さへ屋根の隙間から幾分か空も見えるやうだ。その內雨は愈盛に降つて來る。屋根を叩く音が屋根板裏一重で手に取るやうに聞へる。するとポタリと其所に水でも滴れたやうな音が爲た。見ればこれは如何に醬油とでも云ふべき色合の怪しき一滴である。これ疑も無く屋根から落ちた雨漏、イヤこれには何とも驚かざるを得ない。早速他の室をと思ふたが、ランプ屋さんの二人が占領して居る同じ二階の隣室があるのみで、他には生憎部屋が無さそうだ。總てが斯樣な始末だから萬事何も辛棒が肝心と泣き〳〵其所に小さくなつて縮むで居た。

そのうち又異樣な臭氣が下の方から芬々とやつて來た。自分は堪へ兼て階子の下を覗くと。下では鯉を塗る爲に極く下等の灰墨をグツ〳〵と火鉢で煮て居る。その臭氣は即ち膠の香なのである。今は上下から盛に攻め立てられるので最早身の置所も無く、獨り牢屋にでも這入つたつもりで、辛棒爲で居ました。それで奈何です其上風呂は一町半もある町の錢湯にやらされたのであるから、何とも其上申上る言葉は無いのです。栗橋の一夜は先づ斯樣な風で最も不愉快に送りました。夜に入り床に就くと直ちに蚤軍の練兵が始まり其上隣室のランプ屋さん大蛇の如き高鼾其夜は碌に眼を閉ることも出來なかつた。

スケッチの所感に就いて御話を試むる筈の處未だ研究が付か無いから何れそれは他日と爲て其代に旅行談を掲載致すことに願ひました。

＊　＊　＊　＊　＊

御旅行より御歸宅の由雨天にて嘸御困りの事に御察致候小生も一寸箱根に參りたるに霧に包まれ雨に降られ誠にホンの遊びにて歸り申候云云

（三宅氏通信の一節）